久住昌之の出たとこ勝負 VOL.5

メチャクチャな友人達

友人のカメラマン、滝本淳助さんが、「江戸時代のメチャクチャな奴って、本当にメチャクチャだったんだろうな」と例によってドクトクの事を言ってボクを笑わせた事がある。

でも勝新太郎なんか見てると、世の中が進むにしたがって、メチャクチャな奴というのも少なくなるんだなァ、と実感する。

勝新太郎なんか、最後のメチャクチャな俳優という感じがして、なんだか頼もしい。

今は子供なんかにしても、みんなキレイでどことなく整理されたというか、大人の社会のシステムに合ってるような気がする。

赤ちゃんの顔までもが、なんというか生まれてすぐ整っているように思う。昔の赤ちゃんて、もっとブーーッとしてるような顔してたのに。最近の赤ん坊は二重の眼がパッチリしてたりする。

ボクなんかの小学校の時は、子供はもう少し整ってなかったな。というか実際キタナイ奴が多かったように思う。

特に髪の毛とか。ハナ水でしょ。ミソッ歯でしょ。首のまわりに垢なんかいっぱいつけた奴、足の裏がいつも黒くてカリカリの奴とかいた。

まァ、ボクの生まれる前なんて、もっとキタナイ、それこそシラミとかハタケとかそういう風だったのだろうけど。

ボクが小学校の頃、最初に「こいつはメチャクチャだ」と思ったのはササキシェンという友達だった。

小学校2年生の時ボクが初めて学校でケンカした相手だ。

痩せていて背が高くて白色なのは子供の頃から大人になるまで同じだ。

何でケンカしたか忘れたけど、とにかく摑み合いの殴り合いの引っ掻き合いのハデなファイトだった。そして、なぜか担任の先生が見ていて止めなかった。何か相方に言い分があって、どちらが良い悪いの問題じゃあなかったんだと思う。

最後はどうなったか忘れたけど、とにかくなんとなく終わって、家に帰った。そしたらササキシェンがサンダーバード2号のプラモデルを持ってウチに遊びに来たのだった。

彼は手先が器用で、頭もよくて運動もできる奴だった。彼の父親はピアニストで、彼自身バイオリンをやっていた。もう10年以上会ってないけど、ヴァイオリニストとして活躍している噂を何人もから聞いた。

ササキシェンは、それからよくウチに遊びに来るようになった。だけど、ボクのオヤジの大工用カッターを見つけると、いきなりボクの勉強机の端の角を、「ゾリゾリゾリゾリッ」と1cm以上も削り取ってしまうなんて事をしょっ中やっていた。

ボクも「うわっ」と思ったけど、驚いたのはウチの母で「なんて乱暴なコなの！」と異常なコを見る眼でササキシェンを見ていた。

実際彼は乱暴で、学校の階段（木造校舎だけど）を10段一度に飛び降りたりする。それはさすがに小学校も高学年になってだけど。

その時に、ただ飛び降りるのに飽きると、廊下を歩いている奴の手を摑んで、走りだしてそのまま飛び降りてしまうのだ。引っぱられる方は必死にならないと、それこそ大ケガをしてしまう。

掃除の時に彼をみんなで掃除用具入れに閉じ込めたら、彼はその扉をバリバリ蹴りやぶって出てきた。その時は相当先生に怒られていたようだけど。

教室の天井裏に上がって屋根裏中探険して埃だらけになって出てきたり。

鉄筋の新校舎ができた時も、まっ先にジャンプして廊下の天井に穴を開けたのはササキシェンだった。

中一の頃、モデルガンが流行った。しかし当時できた規制で、モデルガンは全て金メッキされてしまった。ササキシェンは放課後に理科室に忍び込んで、その頃授業でやっていた「イオン化傾向」の差を使って金メッキをはがそうとしたのだった。そういう知的な事もやるのだ。

中学3年の頃は自転車に凝ってて、イタリアの、なんていったっけなー、有名なメーカーのスポーツ車に乗っていた。それも、競輪選手と同じ、ギアが空回りしないやつ。ペダルを後ろに回せばタイヤも後ろに回るという。ボクらはとても恐くて乗れなかった。

彼はそれをスイスイと乗り回し、だけど結局バスにひかれそうになり、自分は飛び降りて間一髪無傷、自転車はグシャグシャになってしまった。

高校の頃もまだ自転車に凝ってて、なんと夜中に中央高速を走って、大月まで行き、料金所前の土手で焚火をして、夜明け前に帰ってくるなんて事をやっていた。
　ちょっと聞けばそんなのウソと思うだろうけど、ボクはそれが本当の話だと確信できる。そういう奴だった。自転車をかついで柵を乗り込え立入禁止の場所を突っ走るなんてのは、ササキシェンには朝飯前の事だったもの。
　でもボクらが大学に入った頃、ササキシェンがアメ車のファイアーバード(?)のオープンカーに乗ってるのを見た、という話を聞いた。
　ボクが最後に彼を見たのもその頃で、ロングブーツに、白い毛皮のショートコートを着て、バイオリンケースを持って歩いていた。
　うわー、芸術家っぽいなァ、かっこいいなァと思った。でも普通の、一般人であるウチの母親なんかから見たら「変人」にしか写らないかもしれない。

最後に見た時のササキシェン（22歳頃?）
ジョン・トラボルタに似てて
それがおかしかった。
「サタデーナイトフィーバー」とまるで
雰囲気が違うから

　ボクの周りには、わりとそういう友人がいて、彼らにボクはすごく影響されているんだけど、自分では他人の机をカッターで削り取るような事はできなかった。
　そうだ、花火をほぐして爆弾やロッケトなんかも作ってたな。ものすごく危ない。教室で水素を爆発させた奴もいた。先生がまっ蒼だった。あたり前だよな、ハハハ。
　ボクが初めて原稿を書くのにカンヅメになったのはニューオータニだった。
　初めてなので朝から晩までずーっと机に向かっていたボクだったが3日目の夜にバクハツして友人がバイトしてる下北に飲みに行き、居酒屋でその友人とバカ飲みした。その友人はボクの身の上を気の毒に思ったのか、お腹をこわしてるのに付き合ってビールをガンガン飲み、大笑いした拍子にブッとオナラをして一緒にミまで出してしまった。
　その瞬間彼はパッと立ち上がり、
「やばい!!」
と言うやトイレに走った。
　そして帰って来て、
「いやー危なかった。パンツでくい止めたけど、そのパンツはトイレに捨ててきた。今オレだからノーパン。落ちつかねぇ〜」
と言ってさらに飲み続けた。
　結局ボクは彼を連れてホテルまでタクシー帰りし、部屋のウィスキーを飲んだ。
　彼は面白がって全裸になって窓に立って外に手を振ったり、挙句の果てにはその部屋のゴミ箱にまたもウンコをしてしまった。
　さすがにボクが笑いながらも怒ると、
「ゴメン!オレ、捨ててくるよ」
と言って胴にバスタオルを巻いただけの姿でゴミ箱を持って部屋を出ていった。
……いいのかなこんな事書いて。もうニューオータニ泊めてくれないかもしれない。本当にスイマセン。反省してます。
　戻ってきた彼に、ゴミ箱をどうしたか聞くと、
「大丈夫、エレベーターホールの隅の方に置いてきたから」
と言う。全然大丈夫じゃない!!でもボクももうさすがにそれを取りに行けなかった。そんなもの。でも、今では私が責任を持って取りに行かねばならなかった、と思っている。反省しています。
　結局、その日は彼もそこに泊まって、翌朝目醒めると、
「あー、何やってんだろう。公共秩序まるで無視……」
とポツリ。
　まったくポツリじゃないぜ。
だけどボク、この「公共秩序まるで無視」というフレーズが気にいって時々思い出しては笑っている。そういう部分が無いとね。面白くもなんともないぜ。
　その彼の友人のお兄さんのイッチャンという人もメチャクチャで、ボクらの大学の学園祭に来て、意味もなく
「よーし、頭に来た、便器ぶっ壊しに行くぞォ!!」
とか言って鉄製のゴミ箱持って便器をぶっ壊し、その破片をまるで戦利品のように握りしめて、教室にガイ戦帰国したり。
　トンデモナイですね。
　イッチャンは今も河岸で働いてるから、たまに会っても気風はいいし豪快だしおかしいし、ホントに面白い。
　ある時なんて飲み屋で飲んでたら近くで火事があって、みんなで野次馬に出てった。そしたらイッチャンがいない。と、
「おーい!こっちだこっち」
というイッチャンの声。そっちを見るとイッチャン、消防車の上に乗って火事を見てるではないか。

　ボクの友人のメチャクチャっぽい人の事を思いつくまま書いてみたけど、こんなのメチャクチャなうちに入らない。と言う人も多いと思います。
　でもこういう友人のパワーがいつもボクをささえてくれてるわけで、ボクがいわゆる「オタク」というのが好きじゃないのも、こういう友人達がいるからなような気がします。
　ついでに『部屋とYシャツと私』だっけ?その歌もモノスゴク嫌いです、オレ。